

そのまま彼の唇は首筋に降りてきた。そんなふうには直截に触れ方をされたらさすがに今の事態を冗談めかしたまま態度のまま乗りきる事は出来そうにない。

「ヤマト」

のしかかる身体に腕を回したら彼のほうが身を震わせた。偉そうな口をきくくせに緊張しているのだと気づく。翻弄されかかっていた俺はそれでヤマトを可愛いなんて思う余裕を取り戻した。

「ははっ、ヤマトもこういうのあんまり経験ない？」

「男相手はそこまで詳しくないな」

「なんだよそのはぐらかしつつも女経験をアピールする答えは」

「お前はどうかなんだ？」

「経験豊富ならこんなにビビってません」

互いに苦笑して、それからもう一度キスをした。吐息の混じりあう口づけは最初のものよりずっと深く、唇を離さないでいようと思うと背中に回した腕だけでは安定しなくてそのうち足までヤマトの身体に絡めてしがみつくと。俺が俺の肩を掴む力も増して爪が食いこむ程に痛かったけど、やめてほしいとは思わなかった。口づけを終えてすぐに気づいたのはヤマトのほうで、自分の手が掴んでいたものを見つめて顔をしかめる。

「すまない、痛かったか」

「んー……なんか熱いけど、平気」

肩にヤマトの舌が触れる。つけたばかりの傷をいたわる優しさで、そのまま血を舐め肉にまで食らいついてきそうな情欲の熱を同時に感じて俺は震えた。誰かにこんなに欲しがられたのなんて生まれてはじめてだと思う。

しがみつかせた手足を解かれてベッドに投げだされた俺をヤマトはじつと見据えた。やがて下衣を脱がせにかかる。下着一枚になった俺のそこに彼は手のひらで触れてきた。

「ちょ、ちよつとストップ」

ヤマトはすぐに手を止めたが、一瞬だけ傷ついた顔をした。

「違うって。これ先に脱がないと、替えがないんだからな」
触れられ続けていたら簡単に汚してしまいそうだと直感したのだ。多分終わってから洗ったのでは朝までには乾かないし、ノーパンで戦いに赴くのは遠慮したい。

得心したというふうには彼は頷き、自身のストラックスに手を掛けた。

「確かに、服を汚す可能性はなくしておきたいな」

全部脱いだ服をヤマトが俺のとまとめてベッドの下に落とした。

「まだ何か……？」

「いやその、別に……」

目の前の男のサイズをこっそり確認していたとは言えず